鈴鉦（れいしょう）響き和讃三昧

落慶式へ総仕上げ

観音寺のご本尊　不動明王と2童子

改修工事の音がひっきりなしの逆井・観音寺の本堂で、和讃の総仕上げである。

本堂の落慶式と観音堂の十一面観音のご開帳が行われる四月七日、和讃のゆったりとした歌声、鈴鉦（れいしょう）の、人の魂を誘い込むような響きが全山を回るはずである。

指導されるのは住職の戸部謹爾さん、豊山流の和讃は曲調はもとより、鈴鉦の所作が流麗だ、といわれているが、なるほどと思われた。

左手に鈴（れい）、右手には撞木（しゅもく）を持つ。鈴を鳴らし、その鈴を撞木で打ち、撞木を水平に左右に動かす。右下に置いた鉦も撞木で打つが座敷用らしい。十三人の歌う和讃が鈴鉦に元気付けられるように続く。住職は歌と所作に厳しく目を配っている。

始めには、御信條、懺悔文、三帰三竟などが唱えられ、般若心経、さらに長い観音経まで読み上げる。おん　あろきや　そわか、という真言も繰り返す。和讃は修行の一つなのである。

練習したのは、花まつり和讃と総本山長谷寺和讃。

ご詠歌と和讃

和歌の三十一文字に節をつけたものをご詠歌、七五調の詞句に節をつけたものを和讃という。和讃は七五調の四句を一連とする。すでに平安朝時代に盛んとなり、江戸時代にかけて行われた。

花まつり和讃

春は霞に鳥歌う卯月八日ぞめでたけれ／花は百千の香に匂うルンビニ園の朝まだき／天地こむるよろこびに生まれ給いしみ子貴と／法のみひかりさしそめし幸おうこの日讃えなん／人は誰しも世にひとり生かせ尊きこのいのち／甘露の水を濯ぎては心に開け法の花／南無大聖釈迦世尊南無大聖釈迦世尊